



今村有策教授退任記念

アジアの伝統的なワザをつなぐ 異文化間シンポジウム

～ゴングとシンバルの製作とこれを取り巻く環境に焦点を当てて～



2026年3月29日(日)
13:30 開演 (13:00 開場)
東京藝術大学
音楽学部 5号館 109 教室
入場無料



公益財団法人 三島海雲記念財団
学術活動支援 採択事業
[主催] 東京藝術大学
未来創造継承センター小泉文夫記念資料室

ご挨拶

アジア各地の祭礼や芸能において、場を清め、人々の心を震わせてきたゴングやシンバル。これら金属製打楽器の力強い響きは、単なる音具としてだけでなく地域の信仰やコミュニティの絆を象徴する存在として受け継がれてきました。当資料室はこのたび、これまであまり光が当たることのなかった「ゴングやシンバルの製作」に焦点を合わせたシンポジウムを開催いたします。近年、この分野の研究は深化をとげ、製作現場における職人たちの高度な技法や、それを支える地域社会の結びつきが明らかになってきました。一方で、現代の職人たちは安価で均一な他地域の製品流入といった市場競争の波にもさらされています。本シンポジウムでは、専門家による最新の研究報告を交えながら、「伝統の音をいかに守り、次世代へつなぐのか」という現代的な課題について皆様と共に考えます。

なお本企画は、当室の活動を支援された今村有策教授の退任を記念し、教授が学生時代から傾倒する小泉文夫が重視した「アジア」をテーマに実施するものです。

東京藝術大学未来創造継承センター小泉文夫記念資料室

プログラム

ご挨拶 毛利 嘉孝 未来創造継承センター副センター長
(東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科長)

〈第一部〉

講演1 李 鍾徳 「韓国の伝統的なゴング製作と無形文化財制度（仮題）」
植村 幸生（コーディネーター、通訳）

〜特別上演 風物（ブムル）：韓国伝統打楽器演劇団 tanbi〜

講演2 柳沢 英輔 「ベトナムにおけるゴングの製作と調律について」

講演3 田村 史子

「Pandhé Gangsa（パンデ・ゴンソ）と Maung Hkat（マウン・カッ）
—インドネシアとミャンマーにおける、
熱間鍛造技法による青銅ゴング製造技法の高度な類似性—」

講演4 田中 教順

「ポピュラー音楽におけるトルコシンバルの過去・現在・未来」

〈第二部〉

ディスカッション コメンテーター：今村有策、西原尚＋全登壇者

韓国伝統打楽器演劇団 tanbi



日本を拠点に、韓国に文化的背景やルーツを持つメンバーによって結成された、韓国伝統打楽器パフォーマンス集団です。韓国の民族芸能「ブムル（風物）」を基盤に、韓国伝統打楽器を中心とした力強くも柔らかな演奏世界を舞と共に展開しています。チーム名「tanbi」は、韓国語で「甘い雨＝恵みの雨」を意味します。私たちの演舞が、百穀を潤す慈雨のように、観る人の心に癒しと活力をもたらす存在となることを願いながら活動しています。

登壇者紹介（五十音順）



今村 有策 IMAMURA Yusaku

大学院美術研究科グローバルアート・プラクティス専攻教授／副学長（国際連携担当）1959年福岡県生まれ。1983年日本大学大学院理工学専攻博士前期課程建築学専攻修了。職制新アリエ勤務を経て、1991-1993年コロムビア大学建築学部客員研究員。その後アートやデザイン、建築など多岐にわたる分野のプロデュース、キュレーションを行う。国内外の若手クリエイターの人材育成、国際文化交流、領域横断で実験的なプロジェクトを推進するアートセンターであったトーキョーワンダーサイトの創設に携わり、2017年まで館長を務める。2001年から東京都知事に文化行政に関する助言・助言を行なう東京都参事も兼務し、アーツカウンシル東京の創設に多大な貢献を果たす。これまで名古屋芸術大学特別客員教授などを歴任。2018年より現職。



植村 幸生 UEMURA Yukio

1963年横浜生まれ。東京藝術大学大学院修了。1989-91年、韓国ソウル大学に留学。上越教育大学助教授を経て、現在東京藝術大学音楽学部教授、東洋音楽学会理事、会長を歴任。専攻は韓国・朝鮮を中心とする東アジアの音楽史と民族音楽学。録音資料を活用した音楽史研究と応用民族音楽学的実践、植民地主義と音楽研究の問題にも取り組む。著書に「アジア音楽史」（共編著、1996）『韓国音楽探検』（単著、1998）『東洋音楽史』（田道高雄著、校注、2014）『民族音楽学12の視点』（共同執筆、2016）『朝鮮の音楽』（兼斎浩志著、韓国語共訳、2022）ほか。



田中 教順 TANAKA Kyojun

埼玉県川越生まれ。東京藝術大学大学院音楽研究科博士課程修了。ジャズミュージシャン菊地成孔主宰のバンド「dCprG」にドラマーとして2010年～16年まで在籍し、FUJI ROCK FESTIVALやブルーノート東京、東京ジャズフェスティバル等に出演。トルコシンバルとの縁はIstanbul社製のシンバルとの出会いで、Istanbul Mehmet社（Istanbul社が2社に分裂したうちの1社）のIstanbul本社工場をこれまで2度訪問。ドラマー／パーカッショニストとしての活動の他、私教を題材とした新作演劇「テラ」、ドキュメンタリー映画「医の倫理と戦争」劇中音楽の制作等も行っている。



田村 史子 TAMURA Fumiko

元筑紫女子大学教授、音工場主宰、カルティカ&クスマ代表、インドネシア・スロカルト王家文化顧問、東京芸術大学大学院音楽研究科卒。1974年に日本人として始めてガムラン研究のためにジャワに留学。音楽、舞踊、儀礼の研究を行うと共に、その音楽と舞踊の実践を提唱。演奏グループの結成、大学などにおける関連授業の創設、招聘公演の監修などに尽力した。1990年代から、ガムランにおける青銅楽器の熱間鍛造技術と流通の研究を開始。ミャンマーにおける熱間鍛造技術、中部ベトナムにおける鋳造技術など、東南アジア全体を俯瞰する研究に発展させ、2019年度から「東南アジアの青銅楽器「ゴング」の製造・流通に関する体系的な研究—その音と形—」をテーマに科学研究助成を受けた。また、複数の分野の研究者、現地の工人たちとの共同研究を進めている。



西原 尚 NISHIHARA Nao

音を基盤にして、サウンド・アート、パフォーマンス、楽器作り、講師などの活動を展開。日常生活とアートの境目なく、音の活動を行う。知らない人と会い、知らない文化や習慣に触れたいという思いからか、そぞろかみかみと遊んでいる。これまで、思いっくに、香川、新潟、ベネチア、東京、アルメニア、台湾、NY、ポーランド、広島、京都、ベルリン、ロシア、中国、フランス、徳島、宮城、岡山、イギリス、ベオグラードなどの地域や国々にて展示やパフォーマンス。生まれは1976年、広島県。東京藝術大学、福山大学、横浜国立大学にて音の授業の非常勤講師。東京大学のアートスクール「アルス・ノーヴァ」の特別助教。



柳沢 英輔 YANAGISAWA Eisuke

東京都生まれ。音文化研究者、フィールド録音作家。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科修了。現在、日本学術振興会特別研究員RPD、NTT 東日本地域情報型ミライ研究所客員研究員ほか。主な研究テーマはベトナムの金属打楽器ゴングをめぐる音の文化、ソニック・エクスプロアターの理論と実践、国内外のレコードレーベルからフィールド録音作品をリリース。主な著書は「ベトナムの大地にゴングが響く」（灯台舎2019年第37回田道高雄賞）、「フィールド・レコーディング入門—響きのなかで世界と出会う—」（フィルムアート社、2022年、第1回音楽本大賞・読者賞）など。



李 鍾徳 I Jeongdog

大韓民国全羅北道無形文化財継承・全北特別自治道無形遺産第43号「方字鑼器（真鍮工芸技術）保持者」。韓国の伝統的な金属工芸品「鑼器（ユギ）」の中でも最高級とされる「方字（ハンジャ）鑼器」の名工であり、とりわけ高度な技術を要する打楽器鑼器の製作を得意とする。1980年代後半に独立し1992年に自身の工房を設立。2006年に全北特別自治道中部に位置する全州（チョンジュ）へ拠点を移して活動を続けている。製作の傍ら2004年には論文「伝統的な方字鑼器製造とその改善策の研究」により中央大学で修士号を取得するなど、学術職として知られる。

【お申し込みフォーム】



※ご予約の上お越しいただけますと幸いです。
※グループでご来場の場合もお一人ずつお申し込みください。

★オンライン配信

オンライン配信に参加ご希望の方は事前予約が必ず必要です。

交通アクセス

東京藝術大学上野キャンパス
音楽学部 5号館109教室
〒110-8714
東京都台東区上野公園12-8

JR 上野駅（公園口）・鶯谷駅 下車徒歩10分
地下鉄 銀座線・日比谷線上野駅 下車徒歩15分
千代田線・根津駅 下車徒歩約10分
京成電鉄京成上野駅 下車徒歩15分
都営バス上26系統（亀戸←→上野公園）谷中バス停
下車徒歩約3分

小泉文夫記念資料室HP



お問い合わせ：odaka@ms.geidai.ac.jp